チェリー・ボーイに口づけを

桶明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チェリー・ボーイに口づけを

【Ｎコード】
Ｎ５００６Ｙ

【作者名】
桶明日

【あらすじ】
少し僕の紹介をしよう。
桜井悠真（さくらいゆうま）、十五歳。
誕生日２月２８日。血液型、一般的に変わり者と言われるＢ型だが、自分は変わり者なんてこれっぽちも思っちゃいない。
彼女いない歴＝年齢。でもまだ十五歳だし、まあこんなもんかなって一生懸命自分を納得させている。
兄弟は変な姉ちゃんが上に三人。要するに末っ子。変な姉ちゃんたちに囲まれて育ったお蔭で、すっかり引っ込み思案になってしまっ

た。引っ込み思案というだけで、決して「むっつり」とかそういうわけではない。そういうわけではないと信じたい。
基本的に女の子は苦手である。だけど二次元万歳。

これから始まるのはそんな僕の（奇跡的な！）恋の物語である。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
専らシリアスな物語を書くことが多いのですが、息抜きのつもりでおバカストーリーを書きます。
お遊びで書くので、ほかの2作品と比べて更新頻度は高くないと思われます。
それでもおつきあい下さる奇特なあなたに感謝します。

どうも、こんにちは。

目の前の女の子の肌は、しっとりと艶やかだった。潤んだ瞳が僕を見つめ、上気した頬が僕を誘う。

「お願い……」

女の子の唇から甘い吐息のような囁きが漏れる。

僕はごくりと喉をならした。自分の二本の手がとてももどかしく感じる。こんなにも動くのが遅いのかと思ってしまう。

震える指先で女の子のカラダに触れようとした瞬間だった。

「悠真(ゆうま)ぁー！」

突然、割って入る声が一つ。

そしてその闖入者のために、僕らの逢瀬(おうせ)は中断となってしまった。

「どぅわあああああああああああ！」

僕は慌てて手にした本をばたんと、閉じる。

心臓はばくばくど強く拍動し、眩暈を覚えるほどだった。

そしてその様子を見て、闖入者は呆れたように鼻息を出した。

現れたのは女。腰まで伸ばされた長い真っ直ぐな髪は、茶色に染められている。彼女が自慢してやまない大きな瞳は、今は明らかに僕を蔑(さげす)んでいた。

「なによ、あんたまたエロ本読んでたの？」

「はっ、はっ、なっ、なっ、何言ってるんだよ、莉子姉(りこねえ)！　静かに勉強してたのに、突然、は、入ってきたらびっくりするじゃないか」

うん、噛み噛みだった。自分でも情けないぐらい。

そしてそうあることが、台詞とは裏腹に肯定の意を表わすことは明らかで。

莉子姉ＫＯ勝ち。

「あっきれた」

まるで一昔前の外国人のように、肩をすくめて掌(てのひら)を返し、やれやれというポーズをする。

いや待て、まだ僕には奥の手がある。ぎりぎりまで抗ってみせる。

「だから違うって、ここ、机に置いてる本をよく見ろよ！」

僕は勇ましく机上を指す。語尾が震えてしまったのはきっと気のせいだ。

そして僕が指さす先には『ｔｈｏｒｏｕｇｈｂｒｅｄ　英文法』という表紙の本が置かれてあった。表紙にはアルファベットが踊るデザインが施されている。どこからどうみても、真面目な参考書である。

これで納得して莉子姉にはさっさと退出してもらいたかった。

が、しかし。

「ふうん、なるほどねえ」

莉子姉はなんと、僕が予想だにしなかった行動を取ったのである。即ち、至極真面目な英文法書を手に取ったのだ。

「え、あ、ちょっと！」

「何よ、ただの英文法書ならあたしが見てもいいはずよね？」

莉子姉は邪気のある笑みを口元に馳せる。ルージュも引いていないのに真っ赤な唇がやたらと憎たらしかった。

滂沱の汗を流す僕を尻目に、非常に非情な姉上様はぱらぱらとページを捲(めく)る。ややあって、姉上様はこちらを向いた。

「悠真君」

「はい、なんでしょう……」
「これ、表紙と科目が違っているようですわよ？」
姉上先生の唇が、ますます意地悪い逆三日月を形作る。そして勝ち誇ったように言った。
「英語ではなく、保健体育のようですわね」
「はい、そのようですわね」
……口調がうつってしまった。しかもお姉系。
そして姉上先生の攻撃はまだまだ続く。
「『ｔｈｏｒｏｕｇｈｂｒｅｄ　英文法』、ね、なるほど。確かにあんたの『ｃｈａｓｔｉｔｙ』には役立っているようだけれどね」
「は？」
頭のいい莉子姉は、よくこんなふうに二重にも三重にも包まれた発言をする。もっとも、その能力は主に悪口を発する際に発揮されるのであるけれど。
そのためこの時、僕は莉子姉の口撃の意味を理解できなかった。だがしかしそれは、不幸中の幸いと言えよう。
「ばーか。もうちょっと勉強しなさい。い、ろ、い、ろ、とね」
「……うるさいな、で、人の部屋にノックもしないで入ってきた理由はなんなんなわけ？」
ようやく平静さを取り戻した僕が、憮然と問う。
「晩御飯できたわよ、って呼びにきたの。もっとも、あんたは既に『御馳走様』した後のようだけど」
いちいち一言多い。更に言うなれば、どっかの誰かさんのおかげで『御馳走』はお預けを食らってしまった。云わば、すんドめ状態である。
「今日の夕飯当番は結姫姉（ゆきねえ）？」

そう問うてみると、「そうよ」と短い返答がかえってきた。
それを聞いて僕はさらに脱力する。
「今日はどこの星の食事なんだろう……」
そうなのである。莉子姉の下の姉――結姫姉は、常人には到底理解しがたい味覚の持ち主で、「発明」と言っては奇々怪々にして奇想天外な奇天烈料理を馳走してくれるのである。
「文句言わないで作ってくれたものは食べなさい」
この人は、異星食に対して不満はないのだろうか、と目前の姉を上目づかいにみる。しかし、見られているほうは飄々としていた。
莉子姉は僕のような常人にも楽しめる料理を出してくれるが、どうも結姫姉に毒されている節がある。結姫姉の異星食をいつも「美味しい、美味しい」と言ってぺろりと平らげてしまうのだ。それは当分、僕にはできそうにない芸当だった。

「分かったよ、すぐ行くから先に行ってて」
ため息混じりに言うと、莉子姉は、お邪魔しました、と去っていった。
僕は再度、嘆息する。

まったく。莉子姉の勘の良さには舌を巻く。もっとも、男に対してはその勘も何故か働いてくれないらしく、よく騙されている。本人は否定するが。

さて、簡単な自己紹介をしよう。

どうも、こんにちは2

僕、桜井悠真（さくらい ゆうま）、十五歳。

誕生日二月二十八日。血液型、一般的に変わり者と言われるB型だが、自分は変わり者なんてこれっぽちも思っちゃいない。

彼女いない歴＝年齢。でもまだ十五歳だし、まあこんなもんかなって一生懸命自分を納得させている。

現在、霧雨（きりさめ）高校一年生。

兄弟は変な姉ちゃんが上に三人。

一番上の姉はさっき、僕の至福タイム――歩々（ぽぽ）ちゃんとデート――に突然割り込んできた莉子（りこ）姉（ねえ）だ。

え？　歩々（ぽぽ）ちゃんって誰かって？

決まっている。僕がこの世界で一番美少女だと信じて疑わない少女だ。だけど恥ずかしがり屋さんだから、残念ながら平面世界から出てきてくれない。

おい、こら。今、「キモい」と言った奴出てこい。まずは歩々ちゃんの麗しの姿を見てからそう同じ台詞が口に出せるか考えてみるといいと思う。

おっと話が逸れた。何の話だっけ？　そうだ、僕の変わり者の姉たちの話。そして一番上の莉子姉の話。

莉子姉、現在二十二歳。誕生日六月二十四日。僕が住んでいる地域で唯一あるそれなりに優秀な大学、桐ノ丘（きりのおか）大学文学部英文科の四年生である。そしてきっと、世間一般からみて美人の範疇に入る容姿をしていると思う。けど、僕は小さいころから莉子姉と一緒に（いじめられて）育ったから全然、綺麗だとか憧れとかそんなものは感じない。んでもって腹立つことに、莉子姉は自分が才色兼備ということを知っていて、それを鼻にかけているふしがある。

だが、そんな完璧な（？）莉子姉にも欠点があって、よく男に騙されている。莉子姉はきっと美人なんだから、もっといい男は見つ

けられるだろうに、何故だかいつも弟の僕からみてもロクでもない奴に引っかかって、散々お金と時間をふんだくられた挙句、捨てられているのがオチだ。ただ、莉子姉は振られても振られても決して泣いたりはしない。ただ家に帰って不貞腐れて寝っころがりながら、テレビを見るのだ。だから僕もそうと知れる。多分、いや絶対、美麗な外見に反して中身は雄々しいのだと思う。

莉子姉についてちょっと語りすぎた。

さて、次は二番目の姉、結姫姉である。

結姫姉、現在十九歳。誕生日一月二日。微妙におめでたさを逃している残念感がある。多分、結姫姉の残念さは生まれた時から始まったのだと思う。結姫姉はやっぱり地元の大学である花咲大学理学部の二年生として通っている。

えーっと、なんていうか……結姫姉は弟の僕が言うのもあれかもしれないが、「どちらの星からいらしたんですか？」と聞きたくなる、そんな人間だ。まずはさっきも言ったけれど、その驚異的な味覚である。

話は変わるが、僕らの両親は仕事の関係でアメリカに出張中。子供四人をほっぽりだして、全くいい気なもんだ。だから、僕ら四人姉弟はこの四人で夕食当番を回しているのだが、結姫姉が担当になった今日みたいな日は、覚悟しなきゃいけない。この間なんかは、目玉焼きに大量のラベンダーを振りかけた謎の料理を出してきた。

そんななら、結姫姉だけ夕食当番から外せばいいのだけれど、本人は何を隠そう大の料理好きで……当番の日は張り切ってしまうものだから、誰も言い出せないのが現状である。

また、結姫姉は大学で斬新化学研究部という怪しさの極みにあるサークルに所属しているわけだが、その実験中にフラスコを破裂させたという逸話の持ち主である。何をどうすればフラスコが吹っ飛ぶのか、アホな僕には想像もつかないが、結姫姉本人に言わせると「発明」なのだという。そしてその発明以降、どうやったらより豪快にフラスコが粉砕されるか奮闘しているという。嘘か本当かは、

本人と結姫姉が所属する怪奇サークルのみぞ知るところである。
続いて三人目の薫姉（かおねえ）。……いや、正直僕も“姉”と呼んでいいのか分からない。そもそも僕は彼女のことを薫姉と呼んだりはしない。専ら薫、と呼び捨てにしている。というのも薫“姉”と呼ぼうものなら容赦のない鉄拳が飛んでくるからだ。というわけで、薫、と呼ぶことにする。
薫は現在十七歳。誕生日は八月二十五日。誕生日が夏休みにあるせいで、友達にメールでしか祝ってもらえず、プレゼントも休み明けにしか貰えないと言って、よく拗ねている。そんな薫は僕と同じ霧雨（きりさめ）高校の三年生だ。勿論、薫は性別的には女性だから制服はブレザースカートなわけだが、入学当初より「スカートを履きたくない！」と主張し、二年間ジャージで通した強者（つわもの）である。しかし最近は、就職を意識してか素直に制服を着ている。けど、僕はなんとなくジャージの薫の方が好きだ。
薫は今でこそ就活のために控えているが、地元のソフトボールチームの強化選手である。そんな猛々しい薫は、主に女子にファンが多い。
以上が僕の家の家族構成。
そしてそんな変な……じゃない、個性的な姉三人一（っていうか、姉二人、兄一人だと思っている）に囲まれて育ったもんだから、末っ子の僕はすっかり引っ込み思案な性格になってしまった。引っ込み思案というだけで、決して「むっつり」とかそういうわけではない。そういうわけではないと信じたい。
基本的に女の子は苦手である。だけど二次元万歳。主に歩々（ぽぽ）ちゃん万歳。
「悠真ぁ、いつまで待たせるの！　いい加減降りてきなさーい！」
不意に、階下から僕を呼ぶ声がする。この凄味のある声は間違いなく莉子姉だ。そろそろいいかないと、小言と嫌みの応酬が待って

いるに違いない。
しかし、僕が中々行く気になれないのは、やっぱり結姫姉の異星食に抵抗があるからだ。
「……修行だ」
そう誰にともなく呟き。僕は今夜の精神鍛錬に挑むこととした。

出会いはいつも突然に1

1

やっと七月に入った今はそろそろ蝉が鳴き始めて、もうすぐくる夏の盛りを期待している。

僕はと言えば勿論逆で。汗が際限なく出て、体は脂でじっとりなって、自分が溶けてしまうのではないかと思ってしまう。

全く、朝っぱらからこんなに暑いんじゃあ、昼間が思いやられる。

まだ完全に目が醒めきっていないのと、暑さで頭が朦朧としながら、僕は歩を進めていた。

僕がこんなに朦朧としているのはもう一つ理由がある。昨日の結姫姉の夕飯が朝になって腹にきたのだ。

――まあ、あの組み合わせじゃあな

心底そう思う。

結姉姉の新作料理は椎茸の生クリーム和えだった。

ただでさえ、僕はあの気持ちの悪いひだひだと、柔らかい食感が大嫌いなのに、それを甘々の生クリームと混ぜるときた。

さすが異星人。地球人の僕には理解しがたい味だった。

しかし案の定、莉子姉は「美味しいわね」と言いながら速攻で食べ終え、薫もまたさっさと食し終えてしまったのだ。うちの姉たちはやはり普通と違っているのかもしれない。

食べないという選択肢もないでもなかったが、それはやっぱり……結姫姉が可愛そうだった。それに二人の姉の（というか、姉一人、兄一人）無言の圧力もあったのだ。

「うぅ、気持ちわる……」

白いお皿に乗せられた、白いデコレーションの茶色いひだひだを思い出し、僕は胃の腑がせり上がるような錯覚に陥った。

そして胃袋のあたりを押さえ、よろめいたところで事件は起こっ

た。
胸と腹に重い衝撃を受けたのだ。
「うわっ！」
「きゃあっ！」
僕とその衝撃の主は同時に悲鳴を上げる。
僕はその場に尻餅をつき、相手は顔を押さえてしゃがみ込んでいた。どうやらぶつかってきた方は女の子のようだ。二つに結んだ髪がなんとなく古めかしい。
「えっと、あの、大丈夫？」
取りあえず、声をかけてみる。
すると女の子の方は恐る恐る顔をあげた。
黒目がちで少し垂れ気味の大きな目。それを縁取る長い睫は上向きにカールしていて、女の子の白い瞼に細かな影を落としている。つんと愛嬌のある鼻。うっすらと桃色に染まった頬。濡れたようにつややかなぷっくりとした唇。
物凄い破壊力だった。少なくとも女嫌いなはずの僕にとっては。
「……」
「……」
暫し無言でお互い見つめあう。僕は喉が固まってしまっていて、声すらでなかったのだ。
「えと、えと！　わわわわわ！　ごめんなさい！」
女の子の方が飛び上がるように立って、ぴょこんと頭を下げる。
可愛い声だった。例えるなら、僕が歩々（ぽぽ）ちゃんに想像していたよ

うなそんな声。え？　それじゃ全然分からないって？　それは申し訳ない。でもとにかく超絶可愛かったといえば理解して頂けるだろうか。

「いや、僕もぼんやりしてたから、ごめん」

なんかありきたりの台詞しか出なかった。

きっとイケメンならここで手でも差し伸べて「大丈夫かい、お嬢さん？」と歯を光らせながら言えたに違いなかったのに。

「ほんと、すいません！　あ、遅刻しちゃう！　ごめんなさい、失礼します！！」

女の子はそう言うと走り去っていった。

僕は彼女が消えた方角を目的もなく見つめる。

あのブラウンとホワイトのチェックのスカートとお揃いの襟は、間違いなく僕が通う霧雨高校のものだ。ということは、あの子は間違いなくうちの学校の生徒ということ。けれど、僕は彼女の顔に見覚えがなかった。

――違う学年なのかもしれないな

そんなことを思いながら、僕は彼女の澄んだ声を頭の中で反芻させる。

『ほんと、すいません！　あ、遅刻しちゃう！　ごめんなさい、失礼します！！』

思わず口元が緩んだ。端から見たら、きっと僕はただの変な人だったに違いない。

でも可愛い声だったからもう一度思い出してしまう。

『ほんと、すいません！　あ、遅刻しちゃう！　ごめんなさい、失礼します！！』

――ん？

あの子は何て言ってた？

『あ、遅刻しちゃう！」

――Ｄｏ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｔｈｅ　ｔｉｍｅ？

僕は時計を見る。現在八時二十分。

――Ｗｈａｔ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｉｔ　ｎｏｗ？

もう一回、時計を見る。やっぱり八時二十分。

そして僕の学校の朝礼の時間は八時三十分。

「うわあああああああああああああああああ！」

大絶叫とともに僕が全速力で駆けたのは言うまでもない話である。

出会いはいつも突然に２―１

２―１

「ぜー、はあ、ぎりぎり間に合った」

荒く息を吐きながら、ほぼチャイムと同時に教室に入る。既に登校していた生徒たちが席に着く音が、がたがたと響いていた。幸いなことに教師はまだ来ていない。

「助かったー！」

安堵の吐息と共に、僕は自分の席を目指す。そこは一番窓際の後ろという、最高の場所だった。僕がじゃんけんという決闘の末に手に入れた領地だ。そこでは教師の目を逃れて、窓から澄み渡った青空を眺めながら安穏とした惰眠に落ちることができる。まさにぼくのための小さな楽園だった。

が、今日はその楽園に細やかな変化が訪れていた。

「あれ？」

僕は首を傾げながら椅子に座る。

僕のための楽園は、本当に僕のためだけに存在していて、所謂“隣の席”というものが存在しない。そのため、僕はそれこそ人の目を気にせずのんびり過ごすことができていたわけだが。

どういうわけか、今僕の隣には、新しい机と椅子が所在なさげに置かれてあった。

見たところ、机の中に教科書も入っていないし、横に荷物も下がっていない。

誰かの悪戯だろうか、とも思ったがそもそもこんなしょーもない、殆ど成果のなさそうな悪戯のために、わざわざどこからか机と椅子を持ってくる奴がいるだろうか？　そしてその机と椅子は一体、どこから持ってきたというのだ。

「悠馬、おっせーよ」

からかい含みの口調で、右斜め前の席の男が振り返った。風紀指導に引っかかるか引っかからないかぎりぎりの深い茶色に染めてある猫毛の髪と、やや吊り上っているのが印象的な目。こいつの名前は穴井拓真。僕の友人である。入学してすぐに話が合ってすぐに仲良くなった。

何の話か。決まっている。僕が崇拝してやまないアニメ「Ｍａｇｉｃ　ｏｎ　Ｅｄｅｎ」略してＭｏＥの話である。要は拓真は同志だったのだ。

そして都合が良かったことに、僕はヒロインの歩々ちゃん一筋であるが、拓真は苺ちゃん派だったのだ。だから僕らはそれぞれの“嫁”を奪い合わずに済んでいる。

そんな似た者同士の僕らではあるが、唯一相違があるとすれば拓真が野球部のイケメンであるということである。イケメンだから女子にモテる。俗に言うアニヲタであることを公言して憚らないのに、その人気は留まることを知らない。むしろアニヲタということがステータスにですらなっている。

全く、世の中は不公平というものだ。こうして歩々ちゃんへの純粋な愛を秘密裡にしている僕が非モテ群で、拓真がモテ群。許すまじ。

考えれば考えるほどなんか腹が立ってきたので、僕は拓真を睨みつけてやった。

「余計なお世話」

その時、教室の扉ががらがらと開いて、担任教師が入ってきた。同時に周囲がざわつく。教師に対してではない。眼鏡の四角顔の教師の顔はみんなももう見飽きているはずだ。

問題は彼の後ろに続いて入ってきた人間だ。

僕は頬杖をついたまま硬直してしまった。

「おい、静かにしろー。今日は転校生を紹介しよう。東京の多賀高校からきた、保泉歩美さんだ。多賀は名門だぞー。お前ら勉強を教えてもらえ」

もし、この世に神様というものがいるのであれば、その御方は何と想像力に欠けることだろう。
だって、だって、こんなのありきたりすぎるフラグではないか。
黒目がちで少し垂れ気味の大きな目。白皙（はくせき）の肌に薄紅が散った頬。
今朝ぶつかってきた少女に違いなかった。
「保泉歩美です。皆さん、仲良くして下さい」
紹介された少女はぺこりと可愛らしくお辞儀をし、そしてにこりと笑んだ。
「可愛いー……」
そう呟いたのは拓真だ。
おいちょっと待て、お前。お前には苺ちゃんがいるじゃないか。
なんて浮気ものだ。
何となくムカついた。

出会いはいつも突然に２－２

「保泉（やすいずみ）はあの空いている一番後ろの席だ。……桜井（さくらい）！」
「は、はい！」
突然、担任教師から名前を呼ばれ、僕は反射的に声を上げた。
すると担任は転校生に向かって再び話しかける。
「今、返事した奴の隣だ。いいな」
「はい」
転校生は頷いて僕の隣の席まで歩いてくる。
主不在の席が設置されていたあたり、まあそういうことなんだろうな、と想像内の範囲ではあったが、それでもやっぱりいざ来られると落ち着かなかった。
「宜しくお願いします」
……なんかフツーに挨拶されてしまった。
どうやら僕が朝ぶつかった男だとは気付いてないらしい。
まあ、そうだよな。朝、一瞬会っただけの人間の顔をそうそう憶えているはずがない。むしろ僕はさぞかし間抜け面（づら）していただろうから、むしろ憶えてくれていなくて良かった。うん、これで良かったんだ。
けどなんか寂しい気がした。
「……というわけで、ホームルーム終わり！　一限目の準備しろー」
担任のそんな台詞で、僕ははっと我に返る。連絡事項を告げていたようだったが、全然頭に入ってきていなかった。
教室は早くも、十分五前のざわめきを取り戻している。
しかし僕はそのざわめきには加担せず、隣の席の女の子を眺めていた。
気付く。
気付かない。
気付く。

やっぱりちょっと気付いてほしい。
そんなことを心の中で呟いていると、僕の視線に気づいた女の子が、ふとこちらを見る。そして再度目が合った瞬間、彼女の表情の中に微妙な変化を認めた。彼女は眉を顰(ひそ)めて僕を無言で見つめ返す。
「……」
「……」
僕が最初に黙ってみていたことが気に入らなかったのだろうか。
俄(にわ)かに落ち着かない気分になる。
「あ、あの……」
僕がそう何かをいいかけた瞬間だった。

「あー！　さっきの！」

女の子のほうが大声を上げた。
すると、周囲が僕等に注目する。女の子の方ははっとし、真っ赤になりながら俯(うつむ)いた。そして今度は小声で僕に話しかける。
「さっき会った人ですよね」
「そ、さっき会った人」
「さっきはごめんなさい」
「いえいえ……。保泉(やすいずみ)……？」
「歩美(あゆみ)です。保泉歩美」
「……」
「えと、えと、どうしました？」
急に黙ってしまった僕に、彼女――保泉サンは慌てた。
「いや、何でもない……」
Ｍａｇｉｃ　ｏｆ　Ｅｄｅｎの歩々(ぽぽ)ちゃんに名前が似てるなとか思ったなんて、口が裂けても言えるはずがない。
「あ、歩々(ぽぽ)ちゃんですね」

心臓が飛び出るかと思った。
僕の心中を言い当てられたかと思った。
硬直する僕を余所(よそ)に、あまりにもさらりと――まるで今日いい天気ですね、とでも言う風に――その台詞を吐いた保泉サンは、僕の机をじっと見つめていた。
そこでやっと気付く。同時に激しい羞恥心が僕を襲い、慌てて机の上に鉛筆で書かれた落書きを体で覆った。
そうだ、あまりにも授業が暇だったので落書きしたんだった。消すのを忘れていた。だって、僕の隣の席は今まで空気だったから、そんな気を遣う必要なんてまるでなかったのだから。
だが、待てよ。
何で保泉サンが歩々(ぽぽ)ちゃんのことを知っているんだ。
「隠さなくっていいじゃないですか。上手なのにい」
一方、彼女はそう言ってむくれている。
「知ってるの……ＭｏＥ(萌え)を？」
声をひそめて聞いてみた。すると、彼女はにこりと微笑んだ。
「はい、小学生の妹が大好きだから」
……ああ、そうだよな。
もともとＭｏＥは小学校低学年向けのアニメだ。もっとも同志の間ではそれが二次創作されて、どんどん怪しい方向に話が進んでいる。因みに僕は「サークル・ずっきゅん☆」が制作している「ＭｏＥ――真夏の世の夢――」が好きだ。別名「ｔｈｏｒｏｕｇｈｂｒｅｄ　英文法」とも言う。作者のＭＡＪＩＴＥＮＳＨＩは神だと思う。歩々(ぽぽ)ちゃんの魅力、純粋さ幼さを最大限に引き伸ばしながらも、あんなどきどきの日常を描くなんて！
おっと話が逸れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5006y/

チェリー・ボーイに口づけを

2011年11月23日19時47分発行